平成 30 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

松永　千紗

１．事業実施の目的

長期調査に向けた受け入れ機関との交渉・面談および研究対象の選定

２．実施場所

アメリカ合衆国カリフォルニア州サンノゼ市

３．実施期日

平成 31 年　2 月 1 日（金）から　2 月 22 日（金）

４．成果報告

●事業の概要

本学生派遣事業の目的は、2 点ある。第一に、2019 年後期に計画している長期調査において受け入れ機関候補となっている組織および大学関係者と面談し、確約を得ることである。第二に、サンノゼ日本町において政治的文化的に重要な行事である「追憶の日（The Day of Remembrance）」に参加し、参与観察を行うことである。

報告者の研究は、サンノゼ日本町内部の多層的なコミュニティを研究対象とすることから、自らの身体を用いて調査を行う参与観察および聞き取りが中心的な調査方法となる。こうした調査においては、長期的な滞在が必須となる。したがって、ビザの獲得は、調査実現に非常に重要となる。アメリカ合衆国において長期的な調査をするためには、ビザの発行が最も大きな障害となる。本事業では、事前にコンタクトを取った上で、受け入れ機関の担当者と面談を行うことを第一の目的とする。

加えて、現在調査対象の候補として複数挙がっているサンノゼ日本町を拠点とする団体から、中心的に取り上げる団体を選定し、調査許可をいただくことを第二の目的とする。具体的には、2 月 19 日に行われる日系人強制収容の追悼式典「追憶の日（Day of Remembrance）」に参加し、調査対象候補団体のインフォーマントを把握する。「追憶の日」は、サンノゼ日本町に関わる全ての日系人関連団体を横断したイベントとして最も大きなものである。したがって、調査対象として暫定している日系三世および対象団体の日本町内部での立ち位置を観察するのに適していると言える。

以上、二つの目的を達成することを本計画の目的とする。本報告では第一の目的に関して簡単に述べた上で、主に第二の目的に関して詳しく述べることとする。

●本事業の実施によって得られた成果

第一の目的である受け入れ機関関係者との面談は、事前に計画していた 5 つの面談に加え、その場で紹介頂いた方々とも、報告者の研究について議論した。具体的には、サンノゼ日系アメリカ人博物館館長および運営委員長、デアンザ大学カリフォルニア歴史センター、

サンノゼ太鼓、カリフォルニア州立大学バークレー校アジア系アメリカ人およびディアスポラ研究科、サンノゼ州立大学日系アメリカ人研究の方々とお会いし、ご協力を頂くこととなった。また、ミルズ大学の沖縄系アメリカ人研究者、サンフランシスコ日本領事館関係者との意見交換に加え、友愛会シニアサービス秋山健康センターでの調査許可を頂くことができた。

第二の目的である「追憶の日（The Day of Remembrance）」への参加および暫定調査対象の観察、また、調査依頼は、概ね成功したといえる。「追憶の日」とは、第二次世界大戦下、アメリカ合衆国大統領フランクリン・ルーズベルトが大統領令第 9066 号を発令した 2 月 19 日を記念する行事である。この大統領令が実質的に西海岸を中心に居住していた日系アメリカ人（以下、日系人）を強制退去および僻地に設立された収容所へと移動させる契機となった。それゆえに、日系人にとっては、強制収容という出来事を追憶する年に一度の非常に重要な行事である。近年、特に 2001 年同時多発テロ事件以降は、イベントの内容にムスリム／アラブ系の人々への言及が増加している。これは、９.11 後のムスリム／アラブ系の人々に対する差別や偏見、憎悪犯罪（いわゆるヘイトクライム）や人種的プロファイリングの犠牲となるなどの状況が、真珠湾攻撃後の日系人の状況と類似していることを根拠としている(Nakagawa 2014)。「追憶の日」は、日系移民第三世代（以下、日系三世）を中心に、強制収容への補償を政府に求めるリドレス運動の一環として始められた。初回は 1979 年 11 月 25 日、感謝祭の週末にシアトルで行われた。続くポートランドでの「追憶の日」が 2 月 19 日に開催されて以降、主にこの記念日を中心としてイベントが行われるようになった。また、リドレス運動が全米に広がるにつれ、「追憶の日」もまた各地で開催されるようになっていった。

本調査では、サンノゼ地域における２つの「追憶の日」イベントで、参与観察を行なった。１つ目は、日本町アウトリーチ委員会（Nihonmachi Outreach Committee）が中心となって行われた「追憶の日」で、2 月 17 日（日）に日本町の中心地に所在するサンノゼ別院の体育館で開催された。２つ目は、デアンザ大学でカリフォルニア歴史センターが主催したもので、同大学の教室で 2 月 19 日（火）に行われた。

１つ目のサンノゼ日本町における「追憶の日」は、1981 年から開始され、2019 年で 39 回目を迎えた。日本町アウトリーチ委員会によると、開催目的は「３分２に及ぶアメリカ市民を含む 12 万人の日系人を強制的に収容させた大統領令第 9066 号の日を記念する」ことである。今年度の参加者は、報告者による当日のカウントでは約 400 名であった。報告者が前回参加した 2017 年に比べると明らかに参加者数が減少している。参加者には日系人が最も多く見られたが、他に白人、メキシコ系、アラブ系などの参加者が観察された。男女比はほぼ同じであった。また、日系人は高齢者の参加が多く、次に 40 代から 60 代の層が占めており、パフォーマーを除けば若者の参加は少ない。中心に椅子が並べられ、前方にスピーチ台、後方と左右のスペースに関連団体の情報配布用の長机が置かれている。報告者はこのイベントにサンノゼ日系アメリカ人博物館の一員として参加した。机を出す団体は、それぞ

れの活動に関して参加者に情報を提供する他、「追憶の日」以降に続く活動を促していた

イベントは主に①招待講演者によるスピーチ、②音楽のパフォーマンス、③追悼キャンドルの点灯、④キャンドルウォークによって構成されており、これらを通して、日系人強制収容を記念する。①招待講演者によるスピーチでは、まず外部からの講演者２名、主催側関係者１名、また収容経験者１名、合計４名がスピーチを行った。うち、外部講演者の１名は、サンタクララ郡内で移民の市民権獲得に尽力する女性で、日系人ではなかった。次に、②音楽パフォーマンスでは、サンノゼ太鼓と詩人とのコラボレーション、11 歳のシンガーソングライターが登場した。また、サンノゼ日本町で有名なウクレレ奏者である男の子と日系人部隊に縁者を持つミュージシャンが、この部隊を題材にした曲を演奏した。最後に、サンノゼ太鼓がパフォーマンスを行った。③追悼キャンドルの点灯では、各収容所の名前と総収容者数が読み上げられ、収容所の模型の前に置かれたキャンドルが点灯された。④キャンドルウォークでは、参加者がキャンドルを持って日本町の１ブロックほどを歩く。「IN HONOR OF THOSE INTERNED DAY OF RMEMBRANCE Feb.19 収容された人々を覚えて　思い出の日　二月十九日」と書かれた旗を持った若者たちが先導し、人々が歩く中、サンノゼ太鼓のメンバーが太鼓を打ち鳴らしていた。

２つ目の「追憶の日」は、全く様子が異なる。デアンザ大学の「追憶の日」は、カリフォルニア歴史センターのセンター長を務める日系三世のトム・イズ氏が主催したものである。大学内のキャンパスセンターで行われているが、市民公開型であるため、学生以外の姿も見られた。イベントは主に①「50 Objects」プロジェクト、②アクティビストの人生史、③学生によるパネルディスカッションで構成されている。まず、強制収容所に関連する５０個のモノとそのストーリーに着目した①「50 Objects」プロジェクトから、ひとつのカバンを題材としたプレゼンテーションが行われた。壇上に置かれた古ぼけたカバンは、来場したイワサキ氏の父が所有していたものである。真珠湾攻撃の後、次々に逮捕されていった友人たちを見て、すぐに自分の番が来ると悟ったイワサキ氏の父は、すぐに出られるよう、玄関に必要なものを詰めたカバンを置いておいた。子どもだったイワサキ氏は、毎朝起きてすぐにカバンを確認し、父がまだ連れ去られていないことを確認したという。このカバンに関するストーリーを起点に、イワサキ氏がのちに強制収容に対する政府からの補償を求める裁判において、日系人側原告団の 1 人として証言を行った映像が流された。次に、②「Nikkei Resister」の主催者の一人で、日本町のコミュニティアクティビストであるジョイス・ナカムラ氏が、彼女の人生と運動の歴史について語った。「Nikkei Resister」は、トランプ氏の大統領当選以降に発足した新しいグループで、「ヘイトに立ち向かう」ことを目的に発足された。グループそのものは新しいが、1970 年代に運動を行なっていたメンバーを中心にしており、ナカムラ氏、またセンター長イズ氏もその一人である。プレゼンテーションでは、ナカムラ氏と多様な運動への参加歴が中心であった。次に、③３名の学生が壇上に上がり、パネルディスカッションが行われた。３名は大学のプログラムの一つである「The Vasconcellos Institute for Democracy in Action」に所属しており、デアンザ大学のコミュ

ニティ活動、および市民運動、社会正義に関する活動を行なっている。フロアとのやりとりを中心にディスカッションが行われ、3名の学生は、ラティーノとして、ムスリムとして、など、それぞれ自らの背景に言及しながら答えていた。

以上、サンノゼ日本町とデアンザ大学の「追憶の日」イベントについて、概要を整理した。両者は共通して、強制収容という出来事だけでなく、現在のアメリカ社会におけるラティーノ、ムスリム、アラブ系への差別や偏見について言及している。ただし、2つの「追憶の日」は、やや異なる性質のイベントであったといえる。前者は、名前の通り、強制収容を思い出し、追悼するためのプログラムが多くを占めていたが、後者は強制収容に言及しながらも、その後のリドレス運動を始めとした社会運動を主題とするプログラムがほとんどをしめていた。多様なスピーカーやパフォーマンスが強制収容という出来事そのものに依拠していた前者に対して、後者は①「50 Objects」からのプレゼンテーションにおいても、リドレス運動で原告団として証言をしたイワサキ氏が登壇している点で、徹底して、運動に重きが置かれている。これは、主催者であるイズ氏の意向によるものである。彼は、70 年代から運動に参加していた日系三世の1人であり、「Nikkei Resister」にも加入している。サンノゼ日本町においても、しばしばイベントを主催しており、その多くが運動および他のマイノリティ集団との協働を目的としたものであった。また、社会正義や市民運動への学生の参加を支援するプログラムを有するデアンザ大学の校風とも関わりがあると考えられる。

本調査において得られた成果は、3 つある。第一に、目的の一つであった長期調査に向けて受け入れ機関の方々と面談をし、許可を頂くことができたことである。第二に、2つの「追憶の日」および関連行事に参加し、イベントの内容を観察から詳しく把握できたことである。「追憶の日」の観察からは、サンノゼ地域の日系人の政治的関心の一側面を捉えることができると考える。これまでの「追憶の日」イベント内容を比較してみると、2001 年以降にムスリム／アラブ系への言及、2017 年トランプ大統領当選以降は、ラティーノに関するプログラムが加わっている。第三に、同地域内の関心の異なるアクターを把握できた点である。2つの「追憶の日」を比較して明らかになったように、主催者の意向や背景によって、同じ記念日であっても、内容や強調点、主張が異なっている。本調査では、関係するアクターとの繋がりを得られた為、今後の調査では、より詳しくアクターとイベント内容の関係について考察が可能となるだろう。

【引用文献】

Nakagawa, Martha. 2014. "Days of Remembrance," *Densho Encyclopedia,* URL: https://encyclopedia.densho.org/Days%20of%20Remembrance/ (accessed Mar 18 2019).

Nihonmachi Outreach Committee. “About NOC: Nihonmachi Outreach Committee,” *San Jose Nihonmachi Outreach Committee*, URL: http://www.sjnoc.org/ (accessed Mar 19 2019)

Hayase, Suzan, Tom Izu et al. “Commentary: Nikkei standing up,” *Nichi Bei*, URL:

https://www.nichibei.org/2017/04/nikkei-standing-up/ (accessed Mar 19 2019)

●本事業について

本事業は、次年度に計画している長期調査に向けた事前準備であり、博士論文の最も重要な調査を成功させるにあたって、重要な意味を持つものである。アメリカでの調査、特に近年地価上昇の目覚ましいサンノゼでの調査は、フィールドワークそのもの以上に、経済的な面で厳しい状況にならざるを得ない。そうした中で、学生への支援を行なって頂けることは、非常に有り難く思う。今後も、このような事業が継続され、多くの学生が恩恵を受けられることを希望している。